

## 1. 「嗜好品としての漫画」とは何か——問題の所在とその意義

本研究は近代日本において「嗜好品としての漫画」がどのように登場したのか、漫画を描くことの嗜好品性とはいかなるものであり、それがどのように変化したのかを明らかにするものである。

鶴見俊輔 (1973) は漫画には「遊び」の要素があるとし、「茶化す」ことで不安と緊張を緩ませる働きがあると指摘した。このように漫画には、「個人の嗜好を反映する」「心身に好ましい効果をもたらす」という点で、嗜好品としての側面がある。鶴見は「限界芸術論」において、従来「芸術」を「作品」としてしか捉えてこなかったことを批判し、非専門家によって生産・享受される「限界芸術」という概念を導入することで、遊びまで含めた日常の営みを捉えかえそうとした。嗜好品として漫画を位置付ける意義も、「表現活動と日常生活との連続性」という視点から、モノとしての性質に注目しつつ漫画を捉えられる点にある。

このような漫画の側面に注目した研究としては、鶴見俊輔や思想の科学研究会の寄稿者 (藤川治水 1967: 佐藤忠男 1964など) による研究があり、「漫画」を媒介として成立するコミュニケーションの諸相に注目がなされている。しかしここでその分析の主眼は「読者 - 作者共同体」の有様にあり、「漫画を描く」という実践そのものについては考察されていない。しかし、嗜好品という視点から漫画の社会性を問い直そうとすると、漫画を描くという実践そのものがいかなるアクチュアリティをもち、どのような経験をもたらしたのか、すなわち漫画を描くことの嗜好品性がいかなるものだったのかという点は、看過し得ないものだろう。この点を明らかにするために本研究が注目するのが、作者と読者のはざまにある境界的存在としてのアマチュア・ファンであり、漫画を描くという実践そのものについての書物である「漫画の描き方」本や通信教育である。

このような視点から「嗜好品としての漫画」を捉えるために、小川博司が提示した論点 (2008) を参考にしつつ、以下の3点を論じる。第一に漫画が他の類似の領域と切り離されて、「漫画」として自律化していく過程、第二に漫画が持ち運び可能なモノとなる過程、第三に「嗜好品としての漫画」が登場する過程の3点である。

## 2. 漫画の自律化

明治初期において「漫画的」な滑稽風刺表現は、言葉、形式などの点で、多くの類似の領域と不可分な状態にあった。これらは錦絵新聞や『平仮名絵入新聞』などの小新聞、絵入雑誌など、漢字漢語の読めない人間を対象とした新聞雑誌を主な場として、「ポンチ」「狂画」などの呼称で、浮世絵師らを担い手として登場した。

これが明治30年代ごろを境目として、メディア環境の変化や近代的芸術観の登場などに対応するように、漫画の概念や形式が整理されていく。明治 28 (1895) 年に今泉一瓢が、従来の滑稽・諷刺表現と差別化する意図をもって、カリカチュアにあたる言葉として「漫画」を用いた。表現形式も、画面を埋め尽くしていた戯作調の文章が減少し、絵の描写も判じ絵的な技法から、写実的な形態把握に基づき誇張を行うものへと変化した。

## 3. モノとしての漫画

明治近代において漫画は大量生産が可能な印刷物として、まず新聞雑誌を掲載媒体として登場する。これを可能にしたのが、明治10年代以降実用化されていく、「活字と木版挿絵が同居した組版を保存できる版」である紙型鉛版という技術的な基盤であった。こうした紙面のビジュアル化を可能にする技術が展開したことによりマスメディア化していく新聞に、挿絵図画が掲載されることが可能になった。

一方で大正後期以降、漫画は印刷物としてだけではなく、二次商品化という形で、新聞雑誌という媒体を越えて、様々に立体化され消費されていく。例えば『報知新聞』連載の「ノンキナトウサン」の双六などである。

#### 4. 「嗜好品としての漫画」

##### 4-1. 絵画投稿の活発化と「漫画を描く」実践の登場

明治30年代後半以降、新聞雑誌の視覚化が本格化していったことに伴い、ポンチ、諷刺画などの絵画投稿が活発化していった。具体的には『時事新報』『萬朝報』などの新聞、『滑稽新聞』などの絵入り雑誌、『日本少年』など子供向け雑誌などである。こうした明治期の絵画投稿は、その呼称が「ポンチ」「滑稽画」「諷刺画」などと一貫しないことからわかるように、幾つかの異なる文脈で、多様な形式で実施されるものだった。

これを踏まえて1920年代以降に「漫画の描き方」本の刊行が活発化する。「漫画の描き方」本は、漫画を「ポンチ」や「コマ絵」などの表現と差異化させようとする意図から、その描法を体系化し確立させる、即ち明治期の多様な実践を、「漫画の描き方」として収斂させることを目的として成立したものだと言える。

##### 4-2. 「嗜好品としての漫画」の登場

このような「漫画の描き方」本において、漫画が可能にするものを論じる際に、重要なキーワードとなっていたのが「大衆」である。漫画と「大衆」を結びつける動きは、1920年代に漫画家の在田綱を中心、一般の絵画との差異を強調する形で起こる。その後の「漫画の描き方」本においても、漫画とは「美術」とは異なり、多くの人に読まれるものであり、この点に漫画の意義があるとされた。そのために多くの「漫画の描き方」本で、漫画と「大衆」を結ぶ技術的基盤である製版・印刷技術が重視された。この点に関して漫画家の須山計一は、漫画は「せつぱつまつた生活感情にある余裕を與へたり、緊張した神経をときほごすやうな効用」をもっており、「現実の大衆の苦しみや悲しみを解決」し得るものであると論じた（『漫画の国』1937, 3(35): 15）。

このように漫画は「大衆」と結びつけて論じられることで、それを描くことを通じて人々の心身に影響を及ぼし得るもの、すなわち「嗜好品としての漫画」という地位を得ていった。こうした位置づけは、大正末から昭和初期にかけての、プロレタリア美術運動における漫画家たちの活動のなかで強化・再生産されていった。

##### 4-3. 漫画を描くことを通じた集団の結成

このような漫画を通じて、漫画家を目指す人びとが、それぞれが住む地域で集団を結成するという動きが活発化する。彼らは漫画家を目指しつつも「漫畫と云ふ藝術を通じ相互に接近し合ふ、ただそれだけで大きな意義がある」（『漫画の国』1937, 3(32): 15）として、通信講座の読者欄などを通じて積極的に交流を図っていた。

以上のように明治期に登場した「漫画」は、1920年代以降、「大衆」と結びつくことで、人々の心身に影響を及ぼし得るもの、すなわち嗜好品として再発見されていった。こうした漫画を通じて1930年代には、アマチュアによる集団結成という動きも見られ、漫画を描くことが、東京を中心として各地域に広がっていった。

#### 引用文献

藤川治水, 1967, 「漫画界の日本再発掘」『思想の科学』第五次(68): 61-64 ▽小川博司, 2008, 「音楽」『嗜好品文化を学ぶ人のために』世界思想社 ▽佐藤忠雄, 1964, 『少年の理想主義』明治図書出版 ▽鶴見俊輔, 1973, 『漫画の戦後思想』文芸春秋